

サンクレメンチにはある種の義務がある。夢を見る義務、夢を見続ける義務だ！
それゆえに、我らがエスコーラは金と絹で自らを飾り立て、
自分の夢を生きる舞台、場面を作り出す。
降伏するのが易き時に戦い、負かし難い敵を負かし、裏切りを求める規則を破り、測り難き限界を
飛び越え、たどり着き難い場所にたどり着く！
(ミュージカル「ラ・マンチャの男」およびフェルナンド・ペソーアの詩より)

エンヘッド：“サブカイでの音楽的な冒険”

暗がりの中に響く出発刻限を告げる第3ホーン。この音楽的冒険に臨もうとする人々の熱狂的な
歓声を受け、スポットライトを浴びる巨匠メストリ・ヂレトール。そして静寂。

プロローグ。笛と指揮棒に従って、待機場所のオーケストラが始動し、宙に舞う魅惑的な音楽、そ
こで黄色と黒の幕がゆっくりと上がる！猫(「キャッツ」)が観客席に忍び込み、「追憶」を呼び起こ
し、ストーリーを焼き直す。「紳士淑女の皆様、『ブラジル歌劇』のパレードへ、ようこそ！さて、サン
クレメンチがブラジルの歌劇の草創期に惹かれるのはなぜか？それは、往時の短編オペレッタが、
自らと同じく、皮肉屋で、批判的で、不遜なものだったからです。さらに、最上級の芸術を大衆に身
近なものとしたからです！フランスの影響が亜熱帯で独自に発展したもの、その辺のマランドロた
ちの行動にまつわる『ウーラー(うわ、すごい)』。1850年ごろには、上質のユーモアが全てで、
スピードが品質と響きあい、そして、わかる人にはわかる、気の利いた短い台詞。ラパに生まれた
パリジェンヌ。そんな彼女が歌うのは、ショッチからワルツへ、そしてマズルカからタンゴへ。単純
ないざから、悪魔に連れ帰られてしまえということに！」

逆行の照明。ライトが点滅するきれいな階段を大スターが降りてくる。彼に付き従うのが、私たち
が密かに楽屋で彼の「コミッサオン・ヂ・フレンチ」と呼んでいる一団。人エダイヤで縁取られた彫
刻的な模様で、胸の部分がシースルーとなった水着に身を包んだ、この上なく美しいラインダンサ
ーが、キンキラのタキシードを着た男性ダンサーにエスコートされて登場する。人生はひとつの「キ
ャバレー」。司会者の声が聞こえる。「さて、エスコーラ・ヂ・サンバのパレードがメッセージ性を持
つミュージカルの最大のものだとすれば、スポットライトの下に企業家と芸術家と技術者が集うこ
の歌劇という巨大で長命の産業、いわゆるショー・ビジネスが、いかに成立し存続してきたのかを、
サンクレメンチによるこの一大ミュージカル冒険においても、サンバのリズムで紹介するのが最善
ではないでしょうか、私たちが！さあ、進むがいい、コミッサオン・ヂ・フレンチ、この力のカーニバ
ル版の正当な代弁者よ。大通りに展開されるスペクタクル。脚を振り上げ、服ははためき、大歓声
を呼び起こし、予期しなかったことが起きるのです。これぞブラジル版のブロードウェイ！その幕開
けは魔術的です！」

この舞台(すなわちパレードコース)が開き、目を見張るようなエレベーターが青々とした山へと昇る。そこには「はねっかえりの修道女見習(サウンド・オブ・ミュージックの MARIA)」が回り、子供たちに向かって「音楽、それは神聖な音楽」と歌う。「何にしても立ち上げにはお金がかかるものだ。シナリオを作り上げて、スターたちと契約して、登場人物を作り上げて、切符を売って、コストのかかる照明をつけて。そうして、人気女優がセミヌードで悪女顔をして、ふくれ面を見せて、一節歌って見せて、やっと大衆が大喜びするって寸法さ。」

漆黒の天井から、この一座の魅惑的な女王でありゴッドマザーである「蜘蛛女」の威圧的な糸が降りてくる。地上では脇から、目のくらむような「ソプロ・ヂ・プルプリーニャ(ラメのひと吹き)」のキャラクターとともに混血の女性たちが立ち上がる。大いなる富が自らの周りに降り注ぐような信じられない感覚に、第一区の観客は緊張し、息を飲む。銀色の紙吹雪が舞い落ちる。蜘蛛女は陶醉した様子で、あたかも宙に浮いているかのように、宙吊りとなって、艶めかしく宣言する。「羽毛の扇が最高の女性を扇ぎ奉る。シキーニャ・ゴンザーガを！そして 1885 年にブラジルは、韻文詩、散文詩、音楽にて歌われた。片足は田舎に置かれ、もう片足は大都会に置かれ。サンジョアンの祭り、酒場の会話、マランドロの散文詩、下町の暮らし、幸せな恋愛。直後に、ガラス球のすだれをかき分けて、アルトゥール・アゼベードが現れる。政治問題に首を突っ込む(イタッ!)のが好きで、「美脚の披露、裸の胸」も忘れることがなかった。カーニバルと同じだ！ユーモアにあふれたまなざしで人生を見つめる。楽しいテーマ、スパイスの効いた言葉、そして、ブブブ・ノ・ボボボ(エロかつこよさ)。近づいてみればノーマルな人など誰もいないと知らせる第六感をもつ人々に、倍の感覚。」

リズム隊が輝くプラスチックの壁を渡す。そのときサイレンが聞こえる。「演劇？」と「美女」が尋ねる。「ミュージカル？」と「野獣」が訊き返す。「サブカイ！」2者が声を揃えて叫ぶ。ロマンティックに揺れる花々の中を進む2者にナレーションが被る。「情景、ダンス、歌。自由をもたらす風が吹いていたのです。それが、舞台演出と振り付けの革命期にあったアメリカです。オーケストラを排除して、バンドを導入しました。そして観客はお目当ての生脚が見えるようにスカートが翻ることを要求しました。そして、チラデンチス広場にもミュージカル劇がやってきました。一線級のスターたちの時間。それが大衆を直撃し、魅了しました。胸元が大きく開いて、珍しい鳥の羽根で飾り立てた服を着た気まぐれな歌姫たち。入口前には押すな押すなの長蛇の列で、入場券は即完売。皆、この上なく美しく才能にあふれた偽金髪をみるべくお金を払ったものです。」

段ボールとベニヤで作られて、ドライアイスの煙がただよう、カサ・ロサダのバルコニーから「エビータ」が両腕を広げる。そして「アルゼンチンよ、泣かないで」を歌う代わりに、不意にブラジルのミュージカルへの賛辞を贈る。なぜならばこのスペクタクルは(審査員の前を除いて)止まってはいけないものだから。そして角を曲がり続ける。「そのとき、ゲームが動きました。カジノのルーレット

が回り出したのです。『ブラジル・パンデイロ』がタンボリンを温めて、数字を動かしました。国中で『ロゼッタ』が求められ、1945 年にはヴァウテル・ピントが『カンタ・ブラジル』を打ち出しました。そこで、ブラジルも投資するようになったのでは？目を引くような効果をもたらす舞台装置が、スターたちと並んで、重要な要素となりました。開いたり閉まったり、上がったたり下がったり、明かりが点いたり消えたり、現れたり消え去ったり！神はブラジル生まれで、外国のレモンで亜熱帯風のレモネードを作り、そうしてブラジルはブラジルのことを知るようになりました。この路線が大当たりであったがために、なんということか、ギリシャ神話のオルフェウスがブラジルのファベラに舞い降りしました。またブラジル版のマイフェアレディでは愛しのピグマリオン婦人はその辺のフェアラの屋台を構えていました。カルロス・マシャードの働きによって、ブラジルのミュージカルは、世界的な成功を収めるようになりました。」

鏡張りの檻が「オズの魔法使い」の竜巻に運ばれてくる。その中には少女ドロシーがいる。鉛の棒をもった警護隊が憐れなブリキ男を叩く。「ああ無情」の登場人物たちが脇から現れ、それを助けようとする。物語の悲しいパートが、ブラジルのミュージカルの口封じにかかる。「ゼ・ポビーニョ（一般人）の舌鋒は研ぎ澄まされ、権力者についての小話がよく作られていました。しかしながら、全て検閲によって骨抜きにされ、それが 60 年代の終わりに幕を閉じるまで続きました。ついには禁止することを禁止する、というトンチ的解決がもたらされ、つれて一匹の雌虎（ソニア・ブラーガ）がデビューし、彼女が皆の髪（「ヘアー」）を逆立てます。「ヘアー」について、ブラジルは思想と音楽という 2 面で、その質の高さに惹かれ、賞賛することになりました。ヒッピーたちのお約束。笑いを作り、戦争はせず、夢がある。日の光を招き入れよう！希望をもつことを使命とするブラジル人にとって、それは回し車のようなものでした。カラバールのように反抗しました。暗くよんだ海に落ちる一滴の水のように。」

スパンコールに覆われた月の上に横たわって「ヴィートルかヴィトーリア」が登場する。ゲイ、マッチョガイ、音楽化された思い出についての、解説不能な台詞。「そこにケバケバしいものが投入されたのです。アクエリアスの時代の幕開けのとき、飛躍、変革、定番からの脱出、新機軸の模索がありました。男性的な筋肉、毛深い脚、つけまつげ、高い跳躍をふんだんに。ブラジルがヨーロッパから 1 世紀前に受け取った、中性的なつくりのミュージカルの活力を、送り返したのがヂ・クロケッチスでした。ただ、それはコインの片面に過ぎません。マッチョではあるけれども間抜けではない、ブラジルの男性なりの定番を表すひと味が欠けていました。そこで、ブラジルをひとつの売春宿に見立てるようなマランドロ版オペラの焼き直しが作られ、ようやくブラジルの男性が歌い、踊り、表現する出番ができたのです。1980 年代から 90 年代にかけては、政治的な内容を離れ、我々が大衆音楽の神話を見直すようになりました。サンバが採り入れられ、アシス・バレンチ、パチスタ姉妹、エリゼッチ・カルドーゾなどが、大舞台で演じられ、賞賛されました。ブラジルの大衆音楽が、感動の激流への導線となったのです。」

私たちの心に刻まれた、国際的な不朽のキャラクターたちが舞台に勢ぞろいする。何人ものハーレクイン、ピエロ、コロンビーナが登場し、ブラジル版サルティンバンコのワゴンを熱狂的に迎え入れる。これが次世代の子供たちを歌わせ、そして「クネクネ踊って、リオはマルシーニャを作り上げた、、、。」閃光。クネクネの感動。クネクネが無ければ人生は「あーあ」だから！お騒がせのマリアが、メンドリちゃんとロバくんとともに、「イエス、我々にはバナナがある」を歌う。ポスト現代。第3千年紀への変わり目について。ブラジルと地球村が、かつてニューヨーク、ラスベガス、パリ、ロンドンに限られていたものを赤道以南で開花させる。監督、プロデューサー、俳優の交流、ブラジルの舞台観客のお祭り騒ぎ。ミュージカルの超常的な謎。謎の植物がリトル・ショップ・オブ・ホラーに入ごめく。小さな雀のようなピアフを歌っているのが本当にビビなのかと、私たちは目をこする。はたまた、アマリアのファドを歌わせれば、ひとびとの腹にずしりと響く。マリーリアはダウバ・ヂ・オリベイラだったかもしれない、あるいはエリスか、あるいは、これらの女性たち全部が彼女だったのか。そして現在、屋根の上のバイオリン弾きと言え、ジョゼ・マイヤーしかいない。

大団円の舞踊。非の付け所のないシンクロ具合でサンバ・エンヘッドに合わせて、一座が踊り、歌う。人生の円形パノラマ、演劇の魔力、白熱のプロ演芸。消えることのない火の粉。イミテーションであることを逆に誇るかのような、幾千もの豆電球で作られたヤシの木。アセテート製のゴールデンライオンタマリンがつりさげられている。「神の恵みあれ」「外国で作り上げられたものをうまくコピーしたと言われるけれども、それは少しのこと。私たちはそれよりも一歩先を歩きます。技術的な名人芸を越え、そこに日焼けした人々のチカチカブンを加えた仕上げにして、出来上がったものに、ひと味違う形で、命を吹き込むのです。私たちの中には革新的な人々が住んでいるのだから。」

エピローグ。壮大な輝く水晶に載ってオペラ座の怪人が飛んでくる。謎めいた仮面の奥に、緑と黄色の涙が光る。ミュージカルの製作に飽かず取り組む人々への愛の涙。夢見る人々。「ミュージカルは、実質的に不思議の国に生きようとする人々の空想の窓です。パリのオペラ座がマルケス・ヂ・サブカイになりますように。怪人が私たちの記憶の中に遊び、夢見る権利を肯定してくれますように。紙の仮面をつけた一団が進みます。もう刻限です。さあ、進みなさい、ミュージカル・カーニバルの世界の遊び人たちよ。人間界にあなたと同じ者は存在しないのです。無限の争いに終わりがもたらされ、不毛の土地に花が開く様子を、世界が見ることでしょう！」

この偉大なジャンルでカーニバルを作り上げたサンクレメンチに幸あれ。制限を解除された幸せに満ちた人生から、この素晴らしい音楽的冒険に飛び出した、私のサンバに幸あれ。半透明のチャームが沈む夕日に向かって、限りなく飛んでいく。カルメン・ミランダがヘナート・フツソに口づけする横影が、暗転まで続く。

終幕

G.R.E.S.サンクレメンチ 2012 年

ファビオ・ヒカルド

サンクレメンチ 2012

資料調査： タニア・ブランダオン、マルコス・ホーザ

(サンバ・エンヘッド)

作：ヒカルド・ゴーエス、グレイ、セルジーニョ・マシャード、マルコス・アントゥーニス、FM、グギーニャ、バニア、フラビーニョ・セガウ

心の準備を

純粋な感動

サイレンはもう鳴り終わった(アララ)

オーケストラが演奏を始めた

私の歌を促した

魔法の中に旅しよう

私のキャバレー、私のサンバ・ノ・ペがある

見せに来て、歓声をあげてもいい

これは私の夢なのか？

「大成功、私はやるぞ」

私のために仮面を被って

私と一緒に来て、今がその時

あなた無しで生きることは考えられない

あなたは芸術家、私たちの祭りを立ち上げる

実際に起こったことから

なんと！ここは、この通りは、パリ

今日、私はマランドロ

悲しみを見て、この世の幸せと思う

私が驚かせたら幽霊も消える(ワオ)

私はヤンチャ

サンバがアゲてきたら、カーニバルになる、

私たちの音楽的冒険

見習い修道女が踊った、歌声に合わせて

そうして私の心をつまえた、、、

エロかっこいいぞ

クネクネがなければ「あーあ」

ツーケーだしまる、脚を蹴り上げて

ブラボー！！サンクレメンチが通る